



37

としよ
かんぽう

Tohoku Fukushi University Library News

BOOK REVIEW

他者を見極める社会的知性としての信頼

総合福祉学部社会福祉学科

教授 黒田文



出版年は古いですが、私が 20 代だった頃に自分を取り巻く世界への理解を深めるために参考になった本です。人間関係に関わる社会的不確実性への対処内容としてお勧めします。

なぜ本書の紹介なのか？を説明するには少々自分史の紹介が必要になるので最初に紙面を割かせて頂きます。私は山形で生誕し 10 代の大部分を宮城で過ごしました。緑豊かな農村っぽい風景を愛でる反面、家制度に依拠する雰囲気(根強い性別役割、男尊女卑意識)を感じさせる宮城には嫌悪感を抱くというアンビバレントな気持ちを抱えて生活をしていました。吉幾三の「俺ら東京さ行くだ」ではないですが、こんな所イヤだ…と飛び出し、勢いあまって東京を越えて京都へ辿り着いた際は、農村文化の呪縛から解放されたと胸をなでおろしたものです。しかし！京都は日本文化・伝統に基づく保守的雰囲気が強い場所です。その後は総じて、日本的なシステムへの疑問をおぼえることになりました(京都は中根千枝の『タテ社会の人間関係』の要素がよくあてはまる)。結果、次は「俺ら国外さ行くだ」と日本を飛び出すことになるのです。小生意気なことを考えて国外へ飛び出しても、当時の私は所詮 20 代、勉学の合間にニューヨークやボストンで息抜きを楽しむミーマー(死語?)さを持ち合わせていました。この生活を通して生まれた次なる疑問が「日本人はなぜブランドが好き？」です。円高の影響もあり、当時、NY でブランド品を求める日本人のなんと多かったことか。高級街でショッピングしているアジア人はほぼ日本人でした。「所さん！事件ですよ」のごとくニッポンの断面があぶり出されていると感じました。

さて、ここからが本題です。なぜ、私は農村文化・日本文化を息苦しいと感じたのか、なぜ日本人はブランド好きなのか…？本書はこれらの疑問に対して「信頼」と「安心」というキーワードを用いて解き明かしてくれます。著者は、信頼という言葉に含まれる多義性を整理し、「信頼」と「安心」とは異なるが混同されがちな概念だと指摘します。本書によれば、日本は、ボスが鉄の掟を実行することで社会的

不確実性を消滅させる「安心」社会であり、「信頼」に根ざした社会ではありません。「信頼」は社会的知性の一つで、「安心」社会にどっぷり浸っている人は、「信頼」という社会的知性を身につけることができないというのが本書の論点です。「安心」社会には、自分以外の他者一般を「信頼」する心を与えない側面があると説明されます。本書では「安心」と「信頼」の違いを検証するための調査が丁寧に紹介されており、構成概念を整理するプロセスも参考になります。

「安心」が社会的知性としての「信頼」を醸成しないという指摘について目を背けずに自分の視界を拡げてみるならば、「信頼」の概念を理解することによって、いま自らが属しているコミュニティにおける他者との関わりや態度は大きく変えられるはずなのです。「安心」と「信頼」の相違は、将来、社会にでて他者と協力ゲームに身を投じる学生のみなさんには、是非、理解して頂きたい内容です。私が呪縛と捉えていた地元の空気は「安心」のための日本的コミットメント(別名、やくざ型コミットメント)に重きをおく生活から生成されるもので、本書を通して「安心」が「信頼」の発達を破壊することを理解して溜飲が下がりました。同時に、「信頼」が人間関係や社会生活の捉え方を一気に展望させるひろがりを持っており、説明の集約力を備えていることにも感心しました。本書は、R. Putnam のソーシャル・キャピタルと関連させて考えられる内容ですし、調査内容は囚人のジレンマ・ゲームを知っていればより楽しめるでしょう。

自分が「安心」に籠もるか、それとも、「信頼」という社会的知性を身につけてコミットメント関係を築くか、それは主体的に選択できることです。この主体的選択のためには、両者が異なる認知様式であることを理解し、本来は自分がそれらを自由に選択できると見抜く必要があります。そのうえで、皆さんが希望するのは「安心」に縛られるコミュニティでしょうか？それとも、「信頼」によって解放されるコミュニティでしょうか？「心理的安全性(安心ではない)」の低い組織は、パフォーマンスが低いという Google の実証研究報告が耳目を集めました。が、「心理的安全性」とあわせて「信頼」の概念を理解することは自分のリスクマネジメントに繋がると思われるため、社会人の皆さまにも一読をオススメしたいです。なお、『安心社会から信頼社会へ』という新書もありますが、本書のほうが議論の展開が丁寧、かつ、詳しいので「信頼」の内容を理解するには本書の一読をおすすめします。

『信頼の構造：こころと社会の進化ゲーム』山岸俊男 東京大学出版会 1998

最近良く見聞きするハザードマップ。どこで、どのような自然災害が、どの程度の規模で起きるのかという被害想定を地図に示したものである。災害の種類が多様であるように、ハザードマップもいくつかの種類があるが、ここでは近年頻発している水害ハザードマップに注目してみよう。

仙台市のハザードマップを開いて東北福祉大学国見キャンパス周辺を見ると、土砂災害警戒区域がわずかに示されているのみで、洪水の浸水リスクは全く示されていない(図1)。よって国見キャンパス周辺は、ハザードマップを見る限り大雨時にも洪水等の浸水リスクが無い「安全な地域」ということになる。本当にそれで良いのだろうか？

大学における学問の第一歩は「当たり前を疑うこと」から始まる。米軍が1947年に撮影した国見地区の古い航空写真を立体画像化し、周辺の地形を判読した図を作ってみる(図2)。すると、大学周辺の地域に、丘陵や平坦な台地を刻む複数の谷が浮かび上がってくる。当然のことながら、大雨が降った際に、地表面を流れる水は、周りよりも低い谷底へと集まって下流へと流れ下る。大学周辺に見られるこれらの谷幅は、数十メートルと比較的広い場所もあることから、かつてそこに存在した普段は穏やかな流れの小川が、豪雨時に濁流の流路に激変し、台地を勢いよく削り取ったのだろうことも推定できる。このように、ハザードマップの情報を鵜呑みにするのではなく、「当たり前を疑うこと」によってはじめて、実際に起こり得る水害リスクの真実が見えてくるのである。



図1 仙台市ハザードマップに加筆

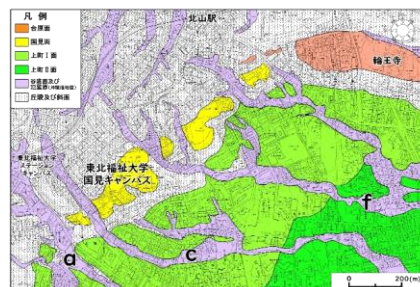


図2 国見地区の地形分類図
紫色が谷を示す(水本, 2022を加筆・修正)

2017 年 6 月に水防法及び土砂災害防止法が改正され、浸水想定区域及び土砂災害警戒区域内に位置し、市地域防災計画にその名称及び所在地が定められた要配慮者利用施設の管理者等に、避難確保計画の作成や避難訓練の実施が義務付けられた。さらに、2021 年 5 月には避難訓練の結果報告が「義務化」された。要配慮者利用施設とは、社会福祉施設、学校、医療施設、その他の主として防災上の配慮を要する人たちが利用する施設であり、小学校や保育所も含まれる。

第3図に示されるように、台地を刻む谷底は、周辺よりも明らかに洪水の危険性が高い。それにも関わらず、国見キャンパス周辺の谷底には、a, c, f に示した場所に小学校や学童保育、保育所等の要配慮者利用施設が立地している。これらの施設は、現行ハザードマップの浸水区域に無いため、避難確保計画の作成や避難訓練の実施対象外となっている。防災上、大変憂慮すべき現実が、本学のすぐそばにも存在



図3 豪雨時に浸水リスクが高いエリアを示す
国見地区のハザードマップ案(水本、2022)

しているということである。よって、地形からみて明らかに洪水危険性が高いと判断されるこれらの要配慮者利用施設は、たとえ現行ハザードマップにその危険性が示されていないとしても、避難確保計画の作成や避難訓練の実施を行っておくべきである。同時に、それらが義務化されている施設以上に高い防災意識を持ち、有事の際には速やかに率先して安全な場所に避難することが極めて重要となる。

このように、東北福祉大学の周りでさえも、当たり前を疑うことによって、各地に共通した防災上の問題点が見えてくる。東北福祉大学の学生は、社会福祉施設、学校、医療施設など、防災上の要配慮者利用施設と関係がある職に就く人も多いだろう。したがって、もはや日常化した自然災害から自分と周りの人たちの命を守るためにも、本学在学中に防災の知識や考え方を得ておくことは必須事項と言えるのである。

ただし、決して現行のハザードマップが不要と言っているのではない。ハザードマップはあくまでも想定図であり、今後も改良されていくべきものである。それにも関わらず、我々はハザードマップの情報が全て正しいと思い込んでいる。そしてその思い込みが、想定外や逃げ遅れといった負の面を新たに生じさせている現状がある。これは、堤防や防波堤、砂防ダム等のハードを過信し過ぎた結果、命を守るために作られた建造物が本来の目的とは逆の効果を発揮してしまい、結果として逃げ遅れの原因となっている実状と同じである。事実、これらのハード対策は、数年に一度の間隔で繰り返す小規模の災害には効果を発揮しても、数十年～数百年に一度の間隔で繰り返す中・大規模の自然災害には必ずしも対応できていない。それにもかかわらず、我々はいつの間にか、これらのハード対策に全てを依存した現代生活を営んでいるのである。このように防災分野において、利便性や安全性を高めるために出現したハザードマップやハード対策は、結果として知の外部化を引き起こし、我々が目の前に見える事象に対して思考する機会を激減させた。そして、先人たちが鋭敏な感覚で捉えていた日常の自然の動きに対しても鈍感になってしまった。

我々人間の一生から見ると、数十年～数百年に一度の自然災害は、繰り返し間隔が長いために、めったに起こらないだろうと感じる。しかし、これらの自然災害を引き起こす自然現象は、数万年～数千年を標準とした「地球時間」という、より長い時間サイクルの中で確実に繰り返し動いている。よって、これら数万年～数千年という時間から見ると、数年も数百年も、ほぼ誤差の範囲に収まる時間オーダーとなる。つまり、我々がめったに起こらないと錯覚している数十年～数百年に一度の自然災害も、実際には日常的に確実に繰り返している現象の一つとして捉える新たな視点を持ち、相応の対応策を講じるべきなのである。これらの事実は、実は目の前にある自然が、我々に全て教えてくれているのである。

このように、身近な自然の仕組みや成り立ち一つを取っても、我々が考えているほど単純な構造にはなっていない。自然現象の動きを捉えるには、当たり前を疑いつつ関連事象を有機的に繋ぎ、より長い時間間隔で物事を見る眼が必要となる。よって、皆さんが知りたい世の中のあらゆる事象の真実も同様に、ネットで調べればすぐに答えが導き出せるような単純な代物でないことは容易に理解できよう。ネットに溢れている常識は、常識ではないのである。

大学とは、資格を得たり勉強だけをしたりするところではない。大学とは、学問や研究を通じて、たとえ小さなことでも今まで誰も見つけられなかったことを明らかにしたり、世の中の常識や価値観をより良いものに変えたりして、次世代に人智を受け継いでいく場である。同時に、一人一人がモノゴトにじっくりと取り組み、真剣に考え議論し、自分自身を発見する場でもある。さらには、純粹に人が知的好奇心を満たすという意味においても、生きがいにも似た愉しみを存分に味わうことができる場なのである。

これからも東北福祉大学という貴重な場を大いに利用して、当たり前を疑い、時代に流されず、真実や物事の本質に迫るような学問の楽しさを存分に味わっていただきたい。そして、ぜひ、大学時代の貴重な経験を今後に活かして、世のため人のためになるような充実した人生を送っていただきたい。

【参考文献】

- ・水本匡起(2022).「洪水ハザードマップにおける地形分類図の意義 ～仙台市国見・荒巻本沢地域の地形を事例として～」
(『東北福祉大学研究紀要』第46巻, p85-98)

～機関リポジトリ～

機関リポジトリというものを聞いたことがあるでしょう。これは、大学や研究機関が所属研究者(教員等)の研究成果を収集・公開するシステムのことです。もちろん本学にもあります。図書館 HP から「機関リポジトリ」へと進んでください。今回、水本先生が参考文献とした上記資料もこちらから読むことができます。この機会にぜひ使ってみてください。



ペーパーレス!!!

ペーパーレスの時代ですね。私も毎年、この時期(秋頃)になると電子書籍派になろうと思って、いろいろ買うんですが、年明けには紙派に戻っています。やっぱり紙っていいんですよ、頑丈で。適当にカバンに突っ込んでも、落としても平気なのでストレスがないんですよ。タブレットとかは落としちゃいけない、カバー付けなきゃいけない、濡らしちゃいけないの三重苦ですから。

とはいえ、紙は貴重な資源です。節約していこうというのは大事な流れかと思います。ご存知のとおり、紙の原料は植物の繊維。世界各地で様々な歴史と製法があったらしく、そのへんも調べるとおもしろそうです。やっぱり特に有名なのはパピルスですかね……

第3回

もう誰も信じない……

ダイジェスト版



パピルスといえば、館長室の窓から見える木、パピルスらしいですね。



え？知らないけど。



え？前のN課長(昨年度末退職)がそう教えてくれましたよ？



聞いたことないですね。



葉っぱの裏を引っかくと文字が書けると言われたんですが……



パピルスってそういうのじゃない？繊維から紙を作る感じじゃないの？



あ…



↑館長室の窓から見える木



ネットに出ているパピルスの写真とは全然全く少しも似ていませんね。



じゃあ、あれは…N課長…



コイケの記憶違いじゃない？



なんか”紙”に関係する木なんじゃないかな。



あ、「タラヨウ」という木に似ているかもしれません。



貝多羅葉(バイタラヨウ)！？



あ——！…いや、全然違う！貝多羅葉ではない。



タラヨウは葉の裏を引っかくと字が書けるらしく、「ハガキ(葉書)」の語源という説もあるらしいです。



課長の説明と同じですね。



かなりそれっぽいな。あの葉も裏に文字が書けるかな。

webにつづく

完全版は図書館のHPで見えね

…が信じるの
…文献のみ！この鉄則を
刻みました。では、この木は



図書館 総合展

Library Fair & Forum

去る 11/1 から 11/30 まで「図書館総合展」が開催されました。

図書館総合展とは、『図書館界最大のコンベンション』(図書館総合展HPより)と謳っているように図書館に関する多種多様な情報が発信される催しものです。東京ゲームショーやモーターショーのように広い会場に出展者毎のブースがあるような雰囲気をイメージして頂けるとよいかもしれません。

コロナ禍以前は、東京国際フォーラムやパシフィコ横浜で開催されていましたが、ここ2年間はオンラインを併用し、距離的・時間的制約なしに参加することができるようになりました。もちろん誰でも参加・閲覧が可能です。

今年は当館広報ワーキンググループでも【全部見せます「としょかんぼう」!】と題して今まで発行した「としょかんぼう」の紹介と 3.11 震災時の図書館の様子についての鼎談*をオンラインのポスターセッションに掲載しました。(図書館総合展HPのアーカイブから見ることができます。)以前は、当館図書館員が創作した【分類カルタ】*というゲームを会場のポスターセッションで発表したこともあります。

あまり変化がないと思われがちな図書館界ですが、意外とたくさんの情報を発信しています。2023 年の図書館総合展もオンライン併用で開催されることが決定していますが、実際に会場に足を運びその雰囲気も一度は味わってみたいものです。

*鼎談…三人で会談をすること。(『日本国語大辞典 第2版』小学館 2000-2002)

当ワーキンググループメンバーになったら自動的に鼎談に参加することになる。一見図書館と全く関係ないような話題でも最終的に図書館や本に関連してくるという不思議さあり。好き勝手に話していても最終的に敏腕編集者がきれいにまとめてくれる。

*分類カルタ…ある事柄(言葉)について「日本十進分類法」での数字をあてるゲーム。(日本十進分類法とは、当館の本の背表紙についているシールの数字、あれです。)

世の中に存在する文学賞は数知れず。芥川賞に直木賞、ノーベル文学賞やブッカー賞と様々である。そこで、私たちに身近な東北という地域に根差した文学賞を数回にわたり紹介しようと思う。

今回はその3回目である。

青森県出身の作家といえば、太宰治に寺山修司、石坂洋次郎、三浦哲郎と早々たるメンバーである。しかし、現在彼らの名を冠した文学賞は、筑摩書房主催の太宰治賞のみ。寺山修司短歌賞（砂子屋書房が主催）は2016年に終了、石坂文学奨励賞は昭和63年に終了とちょっと残念である。

さて、「東奥日報」創刊120周年を記念して2008年に創設されたのが、「東奥文学賞」である。2022年で第7回目をむかえるこの賞は（第一回目の発表は2011年1月）、青森県在住者や青森出身者を対象として、文学界に新風を吹き込むべく始まった比較的新しい文学賞である。賞の詳細を調べるべく、日外アソシエーツ編集の『最新文学賞事典』を開くが、なんと「東奥文学賞」についての記載がないのである！えー、なんでえ??? 地方紙主催の文学賞は、必ず載せてほしいです、日外さん！と、日外アソシエーツの営業さんに連絡を入れると、『小説の賞事典』を参照してほしいとのこと。すると、東奥日報主催の「東奥小説賞」は、昭和31年創設、昭和51年まで続いていたとのこと、選

青森



者を務めていた石坂洋次郎が健康上の都合で選者を辞退し、その功績をたたえてできたのが「石坂文学奨励賞」（S51～S63年）だということがわかった！なるほど～。ただし、『最新文学賞事典』には「東奥文学賞」の記載がないため、次回の出版までには編集に伝えておくとのことである。ぜひ、掲載お願いします！

また、北国ならではの文学賞として「ゆきのまち幻想文学賞」（青森市ゆきのまち通信主宰）がある。雪をテーマにその美しさや幻想性など雪の魅力を最大限に表現できる素敵な文学賞。雪を愛でながらころのおもむくままにツラツラと筆をはしらせるのも気持ちがいいよなあと妄想するも、2021年で終了。これもナイか……。

ナイナイ続きの青森編の旅、いっそ新しい文学賞を創設してはどうだろう。私なら、「縄文サスペンス文学賞」がいいかな。訳して「縄^{ジョ}ーサス」、二時間ドラマにもぴったりでしょ。

図書館 八巻千穂



カビ、カビ、カビの状況にびっくり仰天！洋雑誌書庫が、カビ菌に侵されているのではないかと！何が起きているの？

昨年図書館内から 2 号館 1 階に洋雑誌を移動、これまで図書館内に書庫があったさいには一度も起こったことのない緊急事態なのです。湿気の多い初夏、夏を超えてのこの悲惨な状態、2 か月前まではなんでもなかったはずなのに・・・。

資料には、火も水(湿気)も虫も大敵。これらから資料を守り、保存し継承するのも図書館の大切な役割の 1 つです。資料が痛んでいる様子は、図書館員の心も痛みます。まずは環

境整備をすべく、毎日の湿温度のチェックを開始し、清掃や温度管理も行い、あとはカビを除去する作業のみ。しかし、一度カビに侵された資料は、カビの種類により処理方法も異なり、カビの種類や範囲の特定、除去には専門的な知識と作業が必要となり、私たち図書館員のみではどうにもならないのです。

このコロナ禍において換気が推奨され、そのために外気にさらされた資料にカビが生えるケースも全国的に増えているとのこと。カビとの闘いは長引きそうですので、一部の資料が使えない状況はしばらく続くと思いますが、ご理解とご協力をお願いいたします。



表紙の落ち葉は座禅堂へ上る道を撮ったものです。こんなに紅葉していたのですね。今号も、黒田先生、水本先生のご寄稿により発行することができました。ありがとうございました。(図書館・八巻)



としょ
かんぼう



図書館 HP